神風の伊勢の国にもあらましを・・・
南海部覚悟

目次

プロローグ 1
（**1**） 2
（**2**） 4
（**3**） 5
（**4**） 7
（**5**） 8
（**6**） 10
（**7**） 12
（**8**） 13
エピローグ 15

プロローグ

奥寺　淳はその壁に立ち竦んでいた。
グレージュに塗装された建物の外壁、丁度目線の高さに、漢字の「井」の字の深々とした傷がある。
真ん中の矩形は、壁を突き通して外の通路に倒れ込み、植栽をなぎ倒していた。
よくある ALC パネルとはいえ、厚さは 150mm に及ぶ。
この傷には見覚えがある、京都の玲子たちのマンション、深夜に忍び込んだ賊が、床のボイドスラブに残していったものと同じだった。
「あいつに違いないわね、奥寺君・・・。」
すぐ隣で玲子が低く呟いた。
「盗まれた物品は、ひとつだけらしいです！」
井の字の真ん中の穴から、笑子が顔を出して叫んだ。

広島駅近くの国道沿いに位置する工房、穴が開けられた建物の外壁は隣のタワーマンションとの境界、狭い通路の一番奥にあった。
グレージュの作業服を着た中年の小男を、笑子が連れてきた。
「所長の永文といいます、最近この界隈で空き巣が多発していますので、防犯には留意していたのですが・・・。」
「この通路に防犯カメラは？」玲子が尋ねる。
「ありません。窓が無くて壁だけですから安心していたんですが、こんな大穴を開けられるとは・・・。」
「この工房で何を作ってるのですか？」
「文化財のレプリカ・・・再現模型ですね。各大学や様々な研究機関から依頼されて、発掘された化石や土器・石器、金属製の道具や宝飾品の精密レプリカを制作しています。私どものモットーは、発掘された文化財と同じか最も近い素材で、当時の技法を推定して再現することです。」
「盗まれたのは、再現が完了した古代の壺だそうです。」
「写真か何かありますか？」

「―――奇麗な壺！」
工房の事務所に案内され、モニターに映し出された乳白の壺を見た途端、笑子が大声を上げた。

「九州大学人文科学研究室からの依頼で、鶴首の大壺です。発掘は佐賀県玄海町の仮屋湾海底だと聞いています。」
「台座に乗せられていますが、これは・・・。」
奥寺が画面を指さしながら尋ねる。
「如何にも変わった壺でしてねえ・・・。鶴首の注ぎ口の他に壺の底にも大きな口が開いているんです、其々ねじ込み式の金属の蓋が付いています。」
「上下に注ぎ口？ 壺の寸法は分かりますか？」
キーボードを操作してモニターの画面をスクロールする、寸法が記載された姿図が表示された。
「―――全体の高さが 1.5m 少々、胴の一番太いところの直径が 75 ㎝程ですね。」
「表面が乳白ですが、磁器ですか、陶器ですか？」
「九大の先生の話では、かなり高温で焼成された磁器だと言っています。ですから私共も磁器で再現しました。」
「―――年代は聞かれましたか？」
「13 世紀後期じゃないか、との話です。」

（1）

舟入本町の玲子たちのマンションである。
カップルの他に、奥寺とジョン・クアリが春の陽光あふれるベンチシートで寛いでいる。
「どう、ヌックの居心地は？ 街路樹の若葉が新鮮でしょ！」
トレーの飲み物を勧めながら、玲子が声をかける。
大きな FIX 窓の眼下を、新緑の街路樹をかすめながら、路面電車が通り過ぎて行った。
「よくある間取りの LDK じゃないんですね、此処のマンション。キッチンのすぐ前が列車のコンパートメントみたいになってる。」
「二人だけだからね、リビングもダイニングも要らないのよ。食事しながら寛げるヌックがあれば充分・・・。」
「あんたたちみたいな大男のお客さんが来ると、狭いけどね～。」
果物の大皿を抱えながら、笑子が意地悪そうに呟いた。

「―――鶴首の壺の窃盗事件だけど、私たちの担当になったわ。4 人だけの専従捜査班ね。」
イチゴをほうばりながら玲子が話しだす。
「外壁の痕跡から京都の事件と関連があるって思うんだけど、現時点では単なる窃盗事件

だから、県警本部も大げさに動けない。もし “あの賊” が明瞭に動き始めたら、県警も本腰入れるって本部長の確約貰ってるわ。それまで私たち 4 人は、刑事部の指揮を離れて自由に捜査していいって・・・。」
「———ねぇ先輩、“あの賊” って言うのもどうかと思うから、何か固有名詞つけませんかぁ？」
笑子がアースメロンの一切れを一気に丸呑みした直後の、にやけ顔で呟く。
「何かいい名前ある？」
「京都のとき奥寺君、確かスターウォーズの話ししてたじゃない。スターウォーズのキャラクターの名前はどう？ 例えばヨーダだとか・・・。」
「ジェダイマスターかい？ でも著作権上問題があるし、そんな年寄りじゃなかったんだろ？」
「日本の皇室に関係した事件だったから、もっと和風なのが良いんじゃない、日本の昔の剣豪の名前は？」
ジョン・クアリが急に上半身を起こすと、「ボクデン・ツカハラ、ノブツナ・カミイズミ、ムネヨシ・ヤギュウ、カゲヒサ・イトウ、シュウサク・チバ・・・。」
「———あら何 !? どうして知ってるの？」
「ムサシ・ミヤモト、コジロウ・ササキ、ジュウベエ・ヤギュウ、ソウジ・オキタ、イゾウ・オカダ、トシアキ・キリノ・・・。」
「彼の趣味は剣豪の研究らしいんですよ、京都で “あの賊” と戦って以来、没頭しているようです。」
奥寺が説明する。
「私、沖田総司大好き、華奢な体に美男子・・・。」
「美男子は土方歳三の方じゃないのかい？ 写真も残ってるし・・・。」
「彼女、“あの賊” は女じゃないかって言うのよ、組み合った体の感触が、そうだったって・・・それじゃ、沖田総司にしようかね、笑ちゃん・・・。」
「リュウノスケ・ツクエ、キョウシロウ・ネムリ、サンジュウロウ・ツバキ、イットウ・オガミ、イチ・ザトウ・・・。」
「———もういいわ。」

「でも、犯人はどんな目的なんでしょう。古代の壺のレプリカなんて価値無いでしょうに？」
「外形と素材に興味があったんじゃないかな・・・意外と “総司” さん壺オタクだったりして。」
笑子の質問を奥寺が茶化す、睨み付ける視線をかわしながら更に続ける。
「九大人文科学研究室のサイトを閲覧したんですが、この壺の件は一切記載されてないんですよ。何か特別な理由があるんじゃないかと思います。」
「まず、どこを調べたい？」
玲子がポットのコーヒーを追加しながら尋ねた。
「九州福岡、研究室の担当者に話しを訊いてみたいですね。」

（2）

福岡市西区元岡に拡がる九州大学伊都キャンパス、玄界灘に突き出した糸島半島の内陸部、なだらかな丘陵に学府の建屋が東西に連なっている。
キャンパスの丘から南の方向を見渡すと、水田、畑、住宅地の混在した一面の平野が遥か西の JR 前原駅の辺りまで続いている。
太古の昔はこの平野が浅海で、糸島半島は九州本島に付随したひとつの島であったことが想像される。
広島からピクニック気分で高速を乗り継いできた 4 人組も、ゴールの駐車場に車を停めたまま、流石に疲労の色を隠せなかった。
「———ねぇ奥寺君、長距離行くときは次から普通の車にしようね。」
ジムニーのキャビンに、笑子の嘆きが空しく響いた。

人文科学研究室の建物は、市境を超えた隣の糸島市に属していた。
「担当の安弘といいます、お待ちしていました。」
ネクタイにグレージュの作業ジャンパーの小男が出迎えてくれた。
「失礼ですが、皆様は本当に広島県警の刑事さんなんでしょうか？」
「———と仰るのは？」玲子が訊き返す。
「事前に文部省から、大学事務局を通じて指示があったんです。鶴首の壺に関して、未公開の情報も含め全面的に皆さんに開示するように・・・。」
4 人がお互いの顔を見る。
「盗難に遭ったレプリカの捜査だとは思いますが、それでわざわざ広島から 4 人の刑事さんが来られるのは・・・。」
「私達も包み隠さずお話しします。今回の窃盗事件が、もっと重大な別の事件に関連する可能性が強いんです。まだ確証がありませんのではっきりとは申せませんが、広島県警からの報告に基づいて、警察庁から文部省に協力依頼が上がっているんだと思います。」
玲子が取り繕う。
「そう言えば、今回の壺に関して未だ殆どの情報が、一般開示されていないですね。文化財の発掘に関してはある程度まとまったところで、五月雨式に公開されるのが一般的じゃないですか？」
奥寺が後を受けて尋ねる。
「通常はそうです、発掘に時間がかかりますからねぇ。ただ今回は、大学本部に概要を報告した段階で、詳細な内容の公開を留保するよう指示を受けたのです。」

「それは、どうして？」
「理由は分かりません・・・上からの指示じゃないですか。まあ兎も角、皆さんに全容を開示するよう言われてますので此方へ・・・。」

促されて通された小部屋のテーブルの上に、綿の緩衝材に包まれた乳白の磁器の破片が、複数並べられていた。
「発掘された壺の現物です、これで 1 個分と考えています。3D スキャナーでデーターを読み込み、ジグソーパズルのように慎重に断片を組み合わせて、3D プリンターで出力したのがこの復元モデルです。」
そう言いながら、部屋の奥のカーテンを開けた。
広島の事件現場の工房で見た壺の原物があった。
「―――こんな完全なモデルが復元出来るのに、更にレプリカを作る必要があるんですか？」
笑子が呆れ顔で尋ねる。
「素材が違うし、製造法も当時とは違いますので、研究使用に耐えるモデルではありません。あの工房は、日本で唯一そのような研究用レプリカを作れる業者なんです。」
「素材が磁器で、壺の年代が 13 世紀後期と聞いたんですが、だとすれば大陸からの伝来品という事でしょうか？」奥寺がさらに尋ねる。
「そうとも言い切れません、我が国の磁器製造は 17 世紀初頭に肥前有田で始まったといわれていますが、最近では遥かそれ以前に製造されていた痕跡が、各地で見つかっています。一説では大陸のそれより早かったとの見方もあります。」
「―――海底に幾つ沈んでいたんですか？」
「引き上げて復元出来たのはこれを含めて 3 個だけです、引き上げきれない破片が無数に沈んでいますので、実際幾つあるのか不明です。」
「玄海町の仮屋湾と聞いていますが？」
「湾の入り口の海底です。―――13 世紀後期にこの辺りで何があったかご存じですか？」
「・・・元寇ですか？」笑子が小声で呟いた。
全員の驚きの視線を一心に浴びながら、「・・・歴史の成績良かったんです。」

（3）

若い男性職員がコーヒーのポットをもって入ってきた。
傍にあった椅子に全員腰を下ろすと、カップを啜りながら話は更に進む。

「蒙古の軍船の遺構は、伊万里湾の鷹島が有名ですが、仮屋湾の遺構は5年前に発見されました。さっき、磁器がずっと以前から国内で製造されているようなことを言いましたが、今回の壺はやはり大陸からの伝来だと思います。恐らくこれらの軍船が積んできたものでしょう。ただ、軍船が眠っているのは湾の一番奥なんですが、そこからは一切発見されてないんです。壺があったのは、反対側の湾の入り口なんですよ。」
「工房の永文所長の話では、随分変わった壺だって仰ってましたが。上下に注ぎ口があるとか・・・。」
安弘研究員の緊張した表情が、一瞬穏やかに安らいだように見えた。
「―――実際に復元モデルで確かめてください、その通りに出力されてますから。」

アクリルの台座に乗せられた壺の上下には確かに口が開いている、鶴首の先は明瞭な注ぎ口で小さく、底のそれは大きくて縁にねじのような溝が施されている。
其々の蓋が直ぐ横に置かれてあった。
「―――この蓋の素材は？」
「高純度に精錬された銅の鋳物です、鋳造した後かなり精密に研磨・成形されているようです。」
蓋の内側、つまり壺の内部側には蓋本体に続いて円筒形の籠のような格子状の構造が続いている、底の蓋は籠の直径が太く長さは短く、鶴首の方は細く長く。
「―――これは？」
「分かりません、蓋と一体で鋳造されてますが目的不明です。両方の蓋を閉めると、壺の内部で上下から入れ子式になるようなんですが・・・。」
蓋の外側には双方とも円環が取り付けられ、鎖のようなものが通されて長く延びていた。
「鎖の素材は？」
「蓋と同じ銅です、ただし鋳物ではなく鍛造です。」
「―――13世紀に、金属の鎖があったの！」
笑子が目を丸くして声を上げる。
「鎖は紀元前から存在します、当然我が国にも製造法と共に伝来していたと考えるべきです。―――そんなことより注目して頂きたいのは、双方の蓋の廻りにねじ溝が切られていることです。磁器の壺の部分も同様に加工されている、これは日本はおろか東洋で初めての発見なのです。恐らく膠か何かの助けを借りたんでしょうが、ねじを使って気密や水密を確保するのは、東洋文明に生まれなかった技術なのです！」
興奮する研究員を押しとどめるように、玲子が尋ねる。
「壺に文様は施されていなかったんですか？ 普通このような古代の壺には、レリーフか彩色か、何か文様が施されるもんだと思いますが・・・。」
「施釉はされていますが、文様の発見には至っていません。今後の発掘に期待しているところです。」
研究員の視線に一瞬の戸惑いを玲子は感じ取っていた。
「文様は発見されていませんが、一部の破片からは少量の水銀が検出されています。」
「―――水銀って、金属の水銀ですか？」

「その通りです、顔料の中には水銀を含むものもありますので、彩色されていたのかもしれません。」
嘗めまわすように壺を眺める奥寺に対して、「その 3D モデル差し上げましょうか？ 精密レプリカを発注した後ですから、廃棄する予定でした。もし宜しければ・・・。」

（4）

「三浦副長官、裏で動いてるみたいね、笑ちゃん！」
「文部省から大学事務局への指示のことですか？」
「 “総司” に一番敏感なのは、内閣官房だろうからね・・・。」
大学の一般駐車場に帰る道すがら玲子が呟いた。
「でも、その前に発掘の情報公開を留保するよう指示を出したのも三浦副長官だとすると、政府は今度の事件を大分前から想定してたんでしょうか？」
「分からない・・・多分それは、三浦副長官の筋ではないと思う。笑ちゃんあなた広島に帰ったら、永文所長のことを調べて、ここの研究室との関係もね。」
先に駐車場に着いた奥寺とジョン・クアリが、ジムニーに大きな荷物を積み込んでいる。帰りのドライブは、壺のモデルを伴って、更に悲惨な行程となった。

「文化財復元工房の所長と、有名大学研究室の研究員、二人ともあの年で独身らしいわね？」
「永文所長と安弘研究員は同郷で幼馴染のようです、二人とも実家が佐賀有田の窯元で、高校まで同じ学校を卒業しています。安弘研究員が船舶免許を持っていて、今でも年に何回かレンタルのヨットで、一緒にクルージングを楽しんでいるようです。」
「二人とも磁器や陶器に関係する経歴ね、大学は別なの？」
「安弘研究員が九大で、永文所長は広島大学に進んでいます。」
「———じゃ、あの作業場を研究室に紹介したのは安弘研究員ってことね。それで永文所長は大学卒業して九州に帰らなかったの？」
「東京の大手不動産会社に就職して、マンション管理部門に配属され広島支店に着任しています。」
「それでどうして文化財のレプリカ作りなんか始めたのかしら？」
「不動産会社の同期から聞いた話ですが、最初はバイトのつもりで会社に黙って始めたらしいです。それが職人気質ですかね、本業に支障をきたすようになって、会社から処分を受けたみたいで・・・。」

「―――不動産とは完全に縁を切って、文化財の再生に専念したわけだ。」
「いえ、そうじゃなくてマンション管理士の資格を持っていましたから、付き合いのあった管理組合から委託を受けて、マンション管理のコンサルタントも続けているようです。作業所の隣のタワーマンションも、コンサルタント担当物件だと聞いています。」
「朝からずっとここで寝てるのよこの子、県警の職員寮で夜中何してるんだろ？ ところで奥寺君は何してるの、さっぱり顔見ないけど？」
「ラボに籠りきりで、持って帰った壺と睨めっこだそうです。事案がないからSRIも暇なんです・・・。」

再び舟入本町のカップルのマンションである、電車通りを見下ろすヌックのベンチを、ジョン・クアリの長い脚が占領している。
今や、玲子たち専従捜査班の溜まり場となっていた。
5月に入り清々しい春の空気に湿気が加わった、来週からの予報はずっと雨で、気象台は例年になく早い入梅を予想していた。
ジョン・クアリの脚の横で女性らしく小さく丸まって、かぎ針を動かして編み物をしていた玲子の手が急に止まった。
目を見開いて立ち上がる、驚いたジョン・クアリが体を起こした。
「笑ちゃん！ 奥寺君に連絡して！ 屈強な所員を二人ほど連れて、工房に来てって！ さあっ、ジョン・クアリ寝ている場合じゃないわよ！ その大きな体で働いてもらうからね！」

（5）

工房の現場は、所轄署によって完全に保存されていた。
「永文所長は休暇を取ってるようです、いつものクルージングだろうと所員が言ってます。」
事務所から出てきた笑子が、裏の通路に駆け込んできた。
黄色いテープの規制線を潜って、SRIの3人、ジョン・クアリ、カップルの二人が外壁の穴の前に立つ。
「もう現場保存の必要はないでしょ、奥寺君！」
玲子の鋭い声に奥寺が頷く。
「さあっ、みんなで抱えて倒れた壁を元に戻すのよ！」

笑子を加えた５人が、うんうん言いながら５分程で倒れた壁をもとの位置に戻した。
“井” の字の穴にぴったりと納まって微動だにしない。
「奥寺君、“総司” の刀のメタルジェットの方向は？」
「―――屋外から屋内に向けてです、この通路から壁に斬りつけたのは間違いありません。」
「―――ほら見て、全く手掛かりが無いじゃない。これをどうやって通路側に引き倒すの？」
“井” の字の傷の隙間には恐らく紙一枚通らない、工具で無理やり引き倒した痕もなかった。
「屋内から、蹴り出す他ないでしょうね・・・。」
「―――ということは、犯人は？」
「 “総司” 一人じゃなかった！ 工房内部に共犯者がいた！」
大声を上げかけた笑子が、口を覆って押し殺した。

帰りの車の中である、ハンドルを握る奥寺が何時になく暗い顔で呟いた。
「ラボに寄ってくれませんか、玲子さん？ ちょっと説明したいことがあります。」
「―――壺の件？ ずっと籠りっきりで研究してるらしいけど、目途がついたの？」
「最後の段階で行き詰っています。でも、僕の予想が正しいとすると、ちょっと困ったことになります。」
ラボに着くと窓のない暗い小部屋に通された。
机の上に様々な実験器具がセットされ、中央の大きなガラス球体が目を引いた。
「あの壺の内部を再現したものです。」
球体の内部には、壺の蓋にあった円筒形の籠の格子が、上下から入れ子状にセットされている。
一番底には少量の水が溜まっていた。
「水は荷電粒子源です。円筒形の格子は銅製の電極だと思います、球体の中はポンプでほぼ真空に減圧しています。今から上下の端子に電圧をかけてみます。」
部屋の明かりを消し、奥寺が装置のスイッチを入れ、暫くすると内側の籠の内部がぼんやりとオレンジに光り始めた。
「外側の籠（陽極）のコロナ放電で、水蒸気が荷電粒子となって内側の籠（陰極）へ引っ張られます、陰極の内側に荷電粒子が集まってプラズマ状態となって光ってるんです。ヒルシュ・ミークスフューザーと言います。」
「―――それで？」机に頬杖を突きながら、笑子が退屈そうに呟いた。
「陰極の籠の内側に閉じ込められた荷電粒子は、お互いが衝突して融合します。」
「そして、大量の中性子を発生させます・・・。」
笑子が蒼い顔で後退りした。
「ここからが問題なんです。安弘研究員が壺の破片から水銀が検出されたと言ってたじゃないですか、顔料に含まれる成分だから彩色されていたのかも知れないって・・・あれ、話が逆なんですよ。顔料の成分が検出されて、彩色や文様が発見されない筈はないんです。恐らく相当量の水銀が直接壺の中に存在したんだと思います。」

「―――ということは？」今度は玲子が呟く。
「陰極からのアーク放電によって、真空下の水銀も気化します。閉鎖された空間で気体金属に大量の中性子が降り注ぐと・・・私は安定核核分裂による原子爆弾を、想定しています。」

（6）

「―――ちょっと待って！ 安定核核爆発は韓国の研究所の事故のように、超高圧の環境が必要じゃないの？ それが故に、個人で実現するのは難しいんでしょ？」珍しく玲子が大声を上げる。
「ベリリュウムなどの中性子源を使った場合はそうです、中性子密度を上げるために圧縮しなければならない。でも、フューザーで潤沢に中性子を発生させることが出来れば・・・。」
「個人で、原爆が製造できるの！」
「―――ちょっと待ってください、核銃弾ってあるでしょ、もう個人で作ってるじゃないですか。クラドニなんちゃらで防げるんでしょ？」
今度は笑子が大声を上げる。
「核銃弾とは訳が違う、とてもクラドニシステムで防げる規模じゃない。核銃弾は精々ビルひとつ破壊するのが限度だが、これは都市を吹き飛ばす威力なんだ。」
「今行き詰っているのは、フューザーで発生させる中性子は、一般に低エネルギーなんです。気体金属に核分裂を起こさせるのは、もっとエネルギーの高い高速中性子が必要なんだが・・・。」
「じゃ、ガラス球体に水銀入れて実験してみればいいじゃない！」
「―――もし、想定した通りで、核爆発起こしたらどうするんだよ！ 実験できないから行き詰ってるんじゃないか！」
「―――ちょっと、二人とも興奮しないの！ 質問を変えるけど奥寺君、あなたひょっとして 13 世紀の日本人が原子爆弾を造ったって言いたいの？」
「原子爆弾の認識があったとは思いませんが、こうすれば強力な武器が造れるという経験知識の伝承はあり得ると思うんです。」
「―――動力はどうするのよ！ 13 世紀の人が真空ポンプ持ってたの！」
笑子がたたみ掛ける。
「ポンプは無いけど真空は作れるんだ。水銀を一杯に溜めた大きな樽に、底の蓋をしたあの壺をどっぷり浸けて、鶴首を下にして引き上げると 760 ｍｍから上は真空になる。多

分少量の水も入れたんだと思う、水銀の中で鶴首の蓋をきっちりねじ込めば、そのガラス球体と同じ条件になる。」
「電源はどうする？ 相当な高電圧・大電流が必要だと思うけど、当時は雷くらいしか・・・！」
「―――その雷ですよ玲子さん！」
「じゃ、蓋についてた鎖が雷の引き下げ導線ってこと？」
「具体的な方法は知る由もありませんが、もし可能であれば仮屋湾口の海底にずらりと並べて、蒙古軍の軍船に向けて起爆したとすれば・・・。」
「まさに、神風ね・・・。」

SRI のエントランスで別れ際に振り返ると、「奥寺君、京都の事件で “総司” の刀は知識と設備さえあれば誰でも作れるって言ってたわね、工房にあった設備で作れると思う？」
「大丈夫だと思います、特に永文所長の器用さなら・・・。」
「笑ちゃん、クルージング中の二人を大急ぎで追っかけるわよ！ 所員に訊いて所属マリーナの見当をつけて。」
「―――ガッテンだ！」

二人は観音新町にあるマリーナから、昨夜遅く出帆したことが分かった。
広島湾から周防灘、関門海峡を通って玄界灘を海岸沿いに西へ、平戸海峡を通過し、長崎港に入港して帰ってくる、3 泊 3 日の行程だという。
「二人とも独身貴族ですからねぇ・・・ずっと釣りを愉しみながらのクルージングですよ。」
フロントの担当が無線で連絡を取る。
「おかしいな？ 何時も直ぐ応答があるんだが・・・。」
思い直して携帯にかける、「呼び出し音はするんですが、出てくれません！」
「―――GPS で位置を特定出来ませんか？」
「あれ？ 対馬沖です、聞いてた行程と全く違う！」
長崎県警の所轄署から、観音マリーナ所属のヨットが対馬の東海岸に漂着した旨連絡があったのは、2 時間後だった。
ヨット本体に損傷は無かった。
無人のキャビンの中にはウイスキーのボトルと炭酸水、飲み残しの二人分のグラスが、そのままになっている、船尾に置いてあった大型のクーラーには小振りのシマアジが 2 匹、内臓を処理した形で氷漬けにされていた。

（7）

―――3 日後。
朝からどんよりと湿った大気が都市を包み込んでいた。
西から次第に暗い雲が広がり、昼前には走る車がライトをつけ始めた。
カップルのマンション、例によって専従捜査班 4 名が窓際のヌックで屯している。
「二人とも行方不明じゃ八方塞がりよね・・・。」
対面キッチンのカウンターに頬杖をつきながら玲子が嘆く。
「長崎県警は、ヨットからの転落事故ってことで処理するんでしょうね・・・。」
奥寺がうんざり顔で応える。
「―――あなた、中性子の件は片が付いたの？」
「あれから、近年の原子物理学に関する論文を、虱潰しに当たってみたんです。そしたら、一昨年清華大学が投稿し中国の科学雑誌に掲載されたのに行き当たりました。電圧を印加されたある種のセラミックが、非常に有効な中性子反射体になり得るのみならず、更に高圧で印加すれば超弾性散乱を起こして中性子を励起させる。ニュートロン・ブースターと称しているが、低速中性子を高速中性子に変換出来るようです。」
「―――中性子反射体って？」笑子が尋ねる。
「核分裂で発生する中性子を炉心に押し留める物体だ。原子爆弾ではタンパーといって非常に重い金属で作られる。」
「セラミックって軽いじゃない、どうして反射体になれるの？」
「はっきりとは分からないが、電圧印加によるセラミックの微振動に関係があるらしい。微振動によってセラミックの局所磁場も振動し、中性子のスピンによる磁気モーメントが・・・。」
「―――もういいわ。」

「それにしても、今あの壺は何処にあるんでしょうね？ 窃盗事件が二人の狂言だとして、何の為に自分たちの作ったレプリカを盗む必要があったのかしら？ それも “総司” の仕業に見せかけたりして・・・。」
笑子がしみじみと呟く。
「奥寺君、純粋にあの二人だけの知識で、あれが原子爆弾だってところまで考え付く？」
「―――無理でしょうね、本体がフューザーで、その核融合で生じた中性子で安定核核分裂を起こさせるってのは、専門分野の学者でも中々思いつかないアイデアですよ。」
玲子の質問に、奥寺がドヤ顔で即答した。
「中を真空にして雷を利用し電圧を印加するのが本来の使い方だって、誰かに教えて貰ったら？」

「素人なら、結果がどうなるかやってみたくてしょうがないでしょうね。原子物理を少しでも齧った経験があれば、何かしらキナ臭さを感じてやらないでしょうけど・・・。」
「雷がよく落ちる場所ね、発電所、変電所、高圧電線、電波塔・・・。」
「山の頂上、草原、高木、海水面・・・色々ありますよ。」
「―――ビルの上の避雷針が一番じゃないですか、その為の設備でしょ？」
「隣がタワーマンションだったわね！」
「マンション管理コンサルタントの顧客物件です！」
「―――行くわよジョン・クアリ！ 雷さんに会いに行くんだから、ぼんやり立ってたら頭に落とされるわよ！」

タワーマンションの管理組合理事長は、初老の小太りスキンヘッドの男だった。
「永文所長とは前に住んでたマンションからの付き合いなんです。隣が経営する工房だったから、迷うことなく総会に紹介し、コンサルタントを依頼しました。」
管理用のワイヤレスキーを首から下げ、非常用 ELV を使って最上階へ向かう。
「去年の夏だったか、屋上にソーラーパネルとパワコンを設置させてほしいと依頼がありましてね。工房で使う電力を賄うらしいんですが、確かに長い時間隣に影を落としているし、マンション管理で色々と世話をかけてましたので、理事会で承認して設置して貰うことにしたんです。先日も、パワコンの機材を追加するといって、業者の人と二人で大きな段ボール箱をもって上がりましたよ。」

（8）

最上階の階段を上がり、鉄扉のロックを開けて外に出ると、巨大なパラペットルーバーに囲まれた正方形の屋上だった。
最上部の一隅にはヘリパッドが設置され、他は一段下がって設備機械と配管が整然と並んでいる。
頭上の雲はいよいよ低く垂れこめ、所々で稲光が瞬き始めた。
風が強まり、玲子の長い髪を靡かせる。
笑子からヘアバンドを受け取ると、器用に束ねて首の後ろで括って纏めた。
工房のソーラーパネルは一段下がった端の、日当たりのいい南側に設置されていた。
「―――あの鉄の箱がパワコンです、その後ろ側に何か追加で取り付けたようです。」
理事長が太い指で指し示す。
太い配管を迂回して裏側から近づくと、あの壺のレプリカが置いてあった。

工房の事務所で見たアクリル製の台座に据えられ、上下の蓋から伸びた鎖がパラペットルーバーの架台を伝って太いワイヤーの端子に接続されている。
「———避雷針は何処？ このビルには無いの！」
きょろきょろ周囲を見廻しながら笑子が叫ぶ。
「ヘリパッドがあるから、ここは突針じゃなくてループ式なんだ。理事長さん何か工具がありませんか！」
理事長が慌てて工具を取りに管理室へ降りる、その間にも風は強まり雲は渦巻き、更に暗くなった。
稲光の直後の雷鳴に全員が両耳を抑えて蹲る。
理事長が抱えてきた工具箱からスパナを取り出し、大急ぎで端子のナットを緩める。
「———駄目だ！ びくともしない、ジョン・クアリそのカッターで鎖を切れ！」
心配して近寄ってきた玲子のヘアバンドが緩む、慌てて押さえたその刹那、解けた髪が針のように逆立った。
「———いかん！ 伏せろぉ！」

目の前を黒い影がよぎった！ 次の瞬間、鋭い閃光と一緒に火花が飛び散る！
キナ臭い刺激臭に我に返ると、壺が真っ二つに割れて転がっている、流れ出た水銀の金属光沢が周囲に拡がり始めた。
「———俺の名を語る輩がいたようだな！」
野太い声に上を見上げると、黒ずくめの男がヘリパッドの上から見下ろしている。
———あの “総司” だった。

ジョン・クアリが身構えると、「いつぞやの黒人か！ 次に会ったら相手をしてやる、楽しみに待ってろ。ようしなの娘、お前もだ！」
ヘリパッドの基台にカラビナを掛けると、一瞬振り返って「広島を二度と廃墟には出来んからな！」
そう言いながら空中に身を躍らせる、数秒後には 150 m下の地上を走っていた。
轟音と共に大粒の雨が降ってきた、タワーマンション全体が雨煙で白く霞む。
足元の壺の残骸を見ながら、奥寺が呟いた。「そうか、これを壊せば良かったんだ・・・。」

一週間後、長崎県警本部刑事部から玲子の携帯に、対馬でのヨット漂着の件で連絡があった。
『本件の捜査に関連して、行方不明の安弘研究員のマンションを家宅捜査した。クローゼットの奥に仕舞われていた手提げ金庫の中から、磁器の破片が 2 点発見された。広島県警の黒木係長が海底から引き揚げられた古代の壺に関して捜査している旨聞いていたので、そちらの事件の参考になるかと考え、同破片の写真を送付します。』
との内容だった。
メールに添付して送付されて来た写真ファイルを開けるなり玲子が飛び上がった。
「———笑ちゃん、奥寺君に電話して！」

エピローグ

長崎県警から改めて詳細な破片の画像を送ってもらった。
SRI の巨大なモニターに映し出されたのは、呉須で描かれた美しい文様である。
「一番下に書かれているのは、あの鶴首の壺よね・・・。」玲子がモニターに顔を寄せながら呟く。
「右上の電々太鼓叩いてる鬼みたいのは？」笑子が画面を指さす。
「雷神、雷様だよ・・・壺から上空に連なってるのは、中国の連凧ですかね。連凧に鎖を吊り下げて、引き下げ導線にするんだ。」奥寺が画像を切り替える。
「こっちは真空の作り方だ、ほら、壺を逆さにして水銀の樽から引き上げている・・・。」
「壺の断面も描かれてる、円筒の籠が入れ子になってるのがはっきり分かるわ！」
「———雷が鳴る嵐の日に、連凧を上げて真空にした壺に落雷を誘導する。結果がどうなるかは一切描かれていない。」
「これを見たら誰だって、実際やってみてどうなるか、試したくなるわよね！」
「レプリカを使って実験してみたいけど、大学が資金を出して制作したレプリカを、研究に使わないで壊してしまうわけにもいかない。だから、狂言うって盗まれたことにしたんだろうね！」
「やっぱり、原子爆弾だなんて、考えもしなかったんでしょうね・・・。」
「それにしても釈然としないわね今度の事件、なんだか上の方で全て仕組まれてたような気がする・・・。」
背後の回転いすでウトウトと微睡んでいたジョン・クアリが、急にそっくり返るともんどりうって床に倒れこんだ、事件の終わりを告げる雷鳴のような大音響だった。

フューザーによって安定核核分裂を発生させ、原子爆弾を起爆できるか？
後日、米陸軍のスーパーコンピュータにより、大規模な仮想シュミレーションが行われた。
それによると、28 %の確率で起爆可能との計算結果が得られた。
同時に、高水圧の環境下で起爆した場合、安定核核爆発の反応速度とそのエネルギー密度により、更に熱核反応を誘爆する。
つまり、フューザーの核融合によって核分裂を起爆し、その核分裂によって更に核融合を起爆する連鎖反応が起こり得る確率も、28 %と計算された。

それを受けるように日本政府は、関連学会との統一見解として、仮屋湾周辺の 13 世紀前後の巨大津波の文献記録及び地質上の痕跡が、一切見当たらないことを改めて発表した。

永文所長と安弘研究員の遺体は結局上がってこなかった。
所轄の対馬北署に御礼と報告のため出向いたカップルが、漂着した海岸で花を手向けていると、近くで仲の良さそうな二人の少年が、釣り糸を垂れている。
澄み切った二人の視線を浴びながら、玲子が呟いた。
「私ね、あの二人私たちと同じじゃないかと思うの・・・。」
「———どうしてですか？」
「永文所長の話をした時の、安弘研究員の顔、なんだかとっても安らいでた・・・。」
「そうですね、男性があの年になる迄二人とも独身って言うのも、おかしな話ですしね。」
「だとしたら、二人で海に出かけて、帰ってこなかった理由も解るような気がする・・・。」
「窃盗事件の罪の意識ですか？ レプリカを真っ二つにしたのは二人の責任じゃないでしょ、精々タワーマンションの避雷設備を許可なく変更した建築基準法違反だって、さっき言ってたじゃないですか！」
「そんなことじゃないわよ・・・。」
「———どうしてなんですか！」
笑子が強く訊き返した。
———終わり。

本編は全てフィクションであり、本編に登場する個人名・団体名等は、実在のものと一切関係がありません。悪しからず、ご了承ください。

神風の伊勢の国にもあらましを・・・

著　　南海部　覚悟

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社